

編集後記

編集長(ダン シロウ)

●創刊 15 年で六十号。遅延号も合併号もなく、コンスタントに年四冊出し続けられたのは工夫と幸運の賜物だった。原稿集めに奔走しなくても良いように連載誌に、印刷代、郵送費をカットできるように web マガジンに。そうすることで会員でなくても誰にでも読んで貰えるモノになり、バックナンバーも常時配備できている。読み手の利益を考えた、小さな学会の大きなニュースレターになった。

連載原稿が書きたまることが、自分の人生をちょっと変えてくれたりする経験をしている執筆者も多い。

●三月初旬、能登/輪島でワークショップをしてきた。地震よりもその後の洪水に心が折れかけたと言われているのを聞きながら、東北に通う日々の記憶が重なった。一年余過ぎた輪島の風景は 2012 年秋、大船渡市で目にしていたのと同じようなモノだった。そこが今、山林火災にみまわれている。近年、自然災害が止むことがない。なにか人間が試されているような気がする。

一方世界はディール(なんだこりゃ)を口にする男共の、人的災害といってよいような事態が加速している。残念だが創刊から 15 年の間に、世の中が劣化している気がするのとは老人の愚痴だと一蹴はできないだろう。

まあそんな中でも、出来ることを粛々と行っていく他はない。振り返れば歴史はいつもそういう風に刻まれてきたし、希望を捨てなかった人々の子孫が私達だ。

編集員(チバ アキオ)

第 2 回 対人援助学マガジン合宿が 2025 年 2 月 15~16 日に行われました。場所は京都の湯の花温泉。京都の宿泊施設は高額で泊まれないという状況のなかで、ネットで「合宿での利用もどうぞ！」と記載されていた宿を坂口伊都さん(連載『療育手帳の向こ

う側』)が教えてくれて、予約しました。京都市街地から 1 時間もあればいくことができる亀岡市の「里山の休日 京都・烟河(けぶりかわ)」に泊りました。普段よく前を通っていましたが泊まったことはありませんでした。きくと、団士郎編集長(連載『晩年 D・A・N 通信』)も来たことがあるし、坂口さんも来たことがあるそう。14 時に京都光華女子大学前集合で坂口さんと大谷多加志さん(連載『発達検査と対人援助学』)の車に乗って現地に向かいました。国道 9 号線を西進して、京都縦貫自動車道へ。亀岡インターで降りて、あとは地道で現地へ。団編集長は杉江太朗さん(連載『余地—相談業務を楽しむ方法—』)の車で亀岡入り。高速道路であつという間だったそう。部屋は 2 つで男部屋と女部屋。男部屋の方が広く、そこで早速おしゃべり開始。近況も、対人援助の話もたくさん。17 時半からは夕食。創作的なきれいな料理のコース。ゆったりと食べながら、またまたおしゃべり。デザートまでいただき、またまた部屋に戻っておしゃべり。そして温泉も堪能。夜も遅くならない程度まで話して話し込んで、お休み。私は結構眠ることができました。そして朝ごはんはバイキング。オーストラリアで見た自動パンケーキ焼き機があつて試して食す。日本では初めて見た！チェックアウトまで話して解散。印象に残っているのは、それぞれの学生時代のはなし。クラスの中での位置取りや、就職にたどり着くまで、どう乗り切ったのかの話。勝ち上がり方式の人生を辞めてから、味のある人生が始まるなあ。また、編集部企画として様々企画すると思います。お楽しみに。

編集員(オオタニ タカシ)

対人援助学マガジンもついに 15 年、60 号を数えました。執筆者が総勢 50 名を超えると、毎号数名は連載をお休みされる方もあります。そのこと自体は全く構わないのですが、地味に苦戦するのが目次作成や原稿チェックです。普段は、前号の目次をもとに最新号の目次を作るのですが、目次には休載した連載タイトルが無いので、原稿チェックの際に見落としが生じたり、反対に連載復活の時には目次のどこに戻したらいいのかを確認するため、過去の目次をさかのぼって確認することになるなど、やや作業が煩雑

になっていました。チェック項目が増えると、それに比例して見落としやミスも増えます。また、各連載のタイトル横に掲載回数が()で記入してあるのですが、休載が挟まると段々回数を把握しきれなくなり、確認しきれず空欄のままにしてしまうタイトルも増えてきました。これはそろそろ限界か…と思い立ち、今号から休載分も含めた連載の一覧を作成し、各連載のページ数を入力すると自動的に目次が作成されるようにExcelシートを作ってみました。目次の作成、修正が格段に楽になりましたので、これでミスも減れば大成功です。小さな改善を積み重ねながら、マガジンは続いていきます。

対人援助学マガジン

通巻60号

第15巻 第4号

2025年03月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第61号は2025年06月15日

発刊の予定です。

原稿締切2025年05月25日！

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。**執筆資格は学会員であること。**現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

街が静かだ。口論や取っ組み合いのケンカなど、町中で見かけることがほとんどなくなった。私の子どもの頃は、今と比べてだが、いい大人が街頭で喧嘩口論していた。周りに野次馬もたくさん居た。迷惑だと眉をひそめる人などなく、余興や火事を見るかのように取り囲んでいた。

それが今では、大人は行儀良くなり、一部の高齢者だけが、交通機関の車内や、駅、コンビニなどで担当者に居丈高に暴言を吐いている。

この主人公もホームヘルパーで入ってくれている人に、ワガママをぶつけている。働いている人は業務だからと我慢して、そのうち堪忍袋の緒が切れる。反撃するのではなく職を辞する。全然まともな対策じゃない。

こんな事態に対応した提案の話を「ビックリ水」のタイトルで木陰の物語に描いた。

先日、高齢者サービス現場の人の多い場で、このマンガを見て貰ったがバカウケだった。こんなに笑いが来るとは！と思った。

2025/3/15